

## 龍南

雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 3
ページ	9 1 - 1 0 2
発行年	1911-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6269">http://hdl.handle.net/2298/6269</a>

## 龍 南

### 困つたものだ！

◎時評は愚だ。衆俗を相手に是非の論を戦はした所で、幾何の利益が有るか。其そん麼暇があるなら、好きな書物の一頁でも讀むが好い。書物の中の世界は廣い。悠然として腦裡に開かれた此世界は、歡喜と悦樂と、思想と信念とに充ち充ちて、其所に吾人が無限の幸福は有る。然も愚劣なる衆俗が、有ゆる醜態を暴露して吾人の眼前に殺倒し來つた時吾人は茲に初めて猛然として起たねばならぬ。

◎「龍南の事日に非なり」とは所謂慷慨家に依つて屢々繰返へされた言葉である。其度に引合ひに出された物は龍田山と阿蘇と白川とであるが、然も山も川も依然として依然たるが如く、所謂「日に非なり」も明年も明後年も同様に繰返へされて、怖らく半永久的に續くだらう。

◎「滔々相卒ゐて墮落の淵に走る」等と今更怖しい文

句を並べなくつても、賢明なる或種の諸君は、既にどつくの昔から其淵の底で内々樂觀しながら「探偵が何んだ」と盛に臭い、息を噴く。其が一度破洋服を着ると、猛烈な剛毅朴訥なんだから抱腹絶倒せざるを得ぬ。

◎何も全部が其だとは云はぬ。中には試験の点数が人生最後の目的であるかの如く孜孜として倦まず努める諸君もある。現今の教育制度から見た、此種の所謂「理想的學生」諸君は暫時耳を覆うて向ふを向くが好い。此四五頁を書く間は暫時諸君に用はない。

◎何れの有機体にも必ず多少のバチルスが居るのは自然が不完全な證據である、など、氣障な事は云はないでも、人間の寄集りである五高に腐敗分子の盡きざるは事實である、「此事實を如何にすべきか」

——之が即ち當面の問題である。此問題の爲めに○  
○先生の頭髮が年々冬ざれ、○  
○先生は枯蘆のやうになつて寒風に情ない聲を出す。まことに御氣の毒な次第である。

◎然も此も此も此もな事にはた關ひなしに、濁つた淵の底では歡樂が續いて、濃厚な色彩と、強烈な芳薰と亂調

な音樂の間から、傲然として「探偵が何だ」が連發される。困つた物だ。

◎是を斬る可きか、生かして啓發す可きか。斬れば惜しむ可き彼等の前途を誤る。下手に生かせば、惡例を残すし且つは又、再發して盛に害毒を校友の間に傳染させる。此時當局者は、一校の道義面目を維持す可き爲政者としての立場と。個人の前途を擁護す可き扶掖者としての立場との兩方に脚を懸けて、常に哀れむ可きデイレンマに陥る。是もまことに人氣の毒な次第である。

◎然し之は當局者の罪ではない。むしろ、不完全極る現時の教育制度がもたらす結果で、其が根本的に改善されない限り永久に續き行く可きデイレンマである。此デイレンマに陥つた時、最後の解決は一つに懸つて當局者の方寸に在る。

◎當局者と雖 人間である以上、感情を有する事は無論である。此重大な最後の解決に、感情が少しでも手を出す時、其所に起る可き物は、最怖る可き「情實」である。其最後の解決に、當局者が使ふ天秤は實に正確無比な物かも知れぬが、此に少しの感情

でも働く時、其天秤は既に何等の權威もない。

◎五高に斯る事實が有るとか、有つたと云ふのではない。是は單なる抽象的議論である。且つて「情實」を痛罵しつゝ泣いて、上熊本停車場を去つた男が有つたとか云ふ噂も耳にしたが、其は恐らく徒らなる道聽途説に過ぎなかつたらう。且つ萬一事實としても斯る哀れむ可き苦境に陥つた人の判斷は、多く利己的になり、排他的になるのは人情の弱点であるから、其言説は輕々に信するわけには行かぬ。

◎然し兎に角其天秤が如何に正確な積りでも、狂ひ易いのは事實である。唯此苦しき事實を避けんが爲めには、其天秤に狂ふ餘裕を與へぬやうに——情實をして一步も足を踏み入れさせぬ様に、如何なる場合にも於ても充分嚴密な精査の後に、敢て斷ずたる處置を取るに限る。漢陽で黃興は泣いて何とか聯隊長を切つた。規則は重せねばならぬ、其が當局者の職分ではないか。

◎然し或人は曰ふだらう。前途有望の青年をして、唯一過失の爲めに急轉直下一舉に之を暗黒界に葬るのは餘りに慘酷ではないかと。成程一見一寸御最のや

うではあるが再考すれば「何が慘酷だ」と云ひ度くなる。之が何所か偉い所の有る人間なら一度痛棒を喰へば、必ずや覺醒一番、猛然捲土重來の策をほどこして、再び前途の光明を回復するに違ひない。其首を斬られてヤケを起し一生を誤る如き男ならば、假令許されて無事に學校を出た處で、碌な者になる氣支ひはない。「前途云々」に心配せず、當局者はごし／＼公平にやるが好い。

◎此場合も大に怖る可きは其所謂調査である。賢明なる當局者の判斷が正確なる事は吾人の信じて疑はぬ所である。無論少しの情實もないとして、然も尙其判斷の基礎たる調査が果して充分正確で有るか否か、是が最重大な問題である。

◎世には偽善者の有る如く、又偽悪者も有る。偽悪者を眞の悪者と思ひ偽善者を實際の善者と思ひ違へた爲め、重大な解決を誤つた例は、芝居にでさへ澤山出て來る。學校でも、氣紛れなストームが一寸つた爲に、さんだ花が咲いて、爲めに少なからず其筋から睨まれる自稱豪傑も有る。又目の前では頗る慎ましやかに装ひながら、蔭へ廻れば其淵の底の歡樂に酔

うて「學校さへ休まなけりや……」へん探偵が何だ」を絶叫する。「學校から見た善良な學生」も居る。◎之が團體の表面に映る時は、反對の色に現はれるんだから滑稽だ。斯くて偽善者は善人と混同され、偽悪者は永久惡のまゝで葬られる。だから學寮にバチフスが發生して揭示板に「……事務所に引渡す者には若干の何とかを呈す」てな紙が現れる。斯くて淵の底の歡樂は段々下劣な方に走る。とかく世の中は困つた物だ。

◎學校の方は此位にして置いて、サア此度は生徒の方だ。先刻向ふを向いてると言つた所謂「理想的學生諸君も、此度は此方に向くが好い。やれ記念祭だやれ發火演習だど騒いでる間に、何時か街々の並木も落葉して、龍田口の風に馬糞の舞ひ揚る冬が來た。「叛群の御成績を以て御入學遊され」等と葉書で洋服屋や靴屋に煽てられ、得意になつた新入生諸君も、獨乙語の苦さに、そろ／＼夢がさめた處へ試験が無慈悲に突貫して來て、「オヤ／＼此様な筈ではなかつたが」と今更獅噛みつ面をする其冬が來た。◎龍田山の冬は年に一度しか來ないが龍南思想界は

年が年中冬である。思索もなければ瞑想もない。詩も花咲がす哲學も生れず、單に機械的に書物に假名が附いて、筆記のペーヅが殖ゐて行く。斯くて朴訥に飼はれた健兒の満足は續く。

◎其が何時まで續く満足なのか？試験が濟んで赤丸の灯提行列に逢つて消へ去る如き満足なら、消へぬ先から捨てるが好い。「寒いなあ、一杯やらうか」等と餘計な謀反心を起す時間が有るなら、少しは人生と自己との關係を考へ、自己を如何にすべきかと云ふ問題に思ひ巡らすが好い。

◎單に人は豚の如く食ひ、機械の如く生きて、其で満足し得るか、物質的の幸福に果して幾何の價值が有るか、單なる相對的の價值に生きているのが、人生終局の目的だらうか。浩大無邊の宇宙の中に、果して何處まで自己の存在を肯定し得るか、有ゆる疑問を説く可き鍵である此「自己」は何處より來つて何所に行く可きものか。斯る問題に對して、少しは嚴肅な態度を以て考へるが好い。

◎諸君の皆が皆迄哲學者になれとは云はぬ。(其麼になつては大變だ)唯諸君も天上の人に非ざる以上、

——冷き運命の鎖を腰にして歩む以上、人生に對する自己の問題を解く必要が有る。是に對する吾人の思索を今此處で詳説する暇はない。唯五十年の「時」の力は、今朴訥に飼はれて生きている健兒の影を、悉く地上より一掃す可きものなる事を告げて、更に筆を進める。

◎剛健を生命とする健兒諸君の中に、往々にして思索上の誤謬が有る。何時かの「校風何とか演說會」と云ふ怖しい會の席上で、利己主義と個人主義とを間違へて、一人で怒つて居た大豪傑が居た。頭の悪いにも程が有る。斯る行爲は自己の思想の淺薄を他人に表白する外、要するに何の意義もない。以後宜しく謹むが好い。敢て之大豪傑の爲めのみではない。◎吾人が抱懷せる個人主義は、近代思想が生んだ偉大嚴肅なる個人主義である。之を云ひ換へればニイツェが説いた帝王の道徳も、其出發点は悉く個人の上に在る。否古くから説かれたキリストの教ですら、尙解決は懸つて自己の上に在る。「汝の敵を愛せ」——「汝右の頬を打たれなば更に其左を向けよ」——之偉大なる個人主義の叫びてはないか。

◎「身を殺して仁をなす」——自己衷心の満足が信念の上に落ちて来なければ死ぬるものではない。斯くて凡ての解決は、懸つて自己の上に在る。重す可きは自己である。

◎斯る重大なる問題は謹で他日に譲る。吾人は此横途を元へ戻つて、更に龍南の時評に歸る。何時か某所で某君の演説を聞いた。龍南の思想を代表したと見る可き演説を聞いた。中に曰く「吾人は職分を遂行する事に依つて、始めて剛毅朴訥に到達する事が出来る」と。

◎妙な議論である、何時の間にか剛毅朴訥が目的に化けて終つた。吾々が學校から與へられた「呉れろ」と頼んだ事はないが「モットーは「剛毅朴訥近於仁矣」である。従つて吾々が理想の竟極は仁であつて剛毅朴訥は單なる一手段である。單なる一階梯である。未だ仁其物ではない。如何に慌てゝも平然として手段を目的と認めるのは餘りに甚しいではないか。

◎「假りに百歩を譲つて」其人の説は先づ職分の逐行に依つて、朴訥に達し、更に仁に進むとしても、尙吾人に意見が有る。職分を果すと云ふ事は、之を

裏から云へば、如何でも好い事は捨てゝ置いて好いこと云ふ意味になる。處が世の中には、如何でも好い事が、後には案外重大な事になる場合もある、斯る時——如何に之を解決するだらうか、代表的演説者の説が聞きたい。

◎「九高生は自覺した。自覺してハイカラになつた。中には自覺し過ぎて縞のマントを得意がつてる人も有る」と嘲つた男が有つた。そして其自覺した健兒が、夜寒の闇に護謨輪を飛ばして、南走するに到つては眞に沙汰の限りである。其麼自覺なら一日も早く捨てるが好い。敢て校風の爲め本人の爲め計りではない。親兄弟の爲めにもなる。

◎未だ親の脛を噛むながら——三浦先生の所謂「血の滴るやうな金」で遊ぶ奴等に限つて、自分で金がとれ出すと、豹變して吝嗇坊となるにきまつて居る。其が又腰が曲ると。鹿爪らしい顔をして、若い息子に道學を説くんだから遣り切れない。悪い事は云はぬ。若い間が大事だ。其麼不心得はよして、獨乙の辭書でも引くが好い。

◎要するに五高は依然五高である。去年も一昨年も

今年と大差がない如く、明年も明後年も恐らく此まゝで續くだらう。斯くてタイムの力は學資金の問題と相待つて、年々幾多の大學生を生み學士を生む。斯くて年々新たな慷慨家は起つて「日に非なり」を絶叫し、新に自覺した人々は、新進氣鋭の勢で南走しては歡樂の淵の底から「探偵が何だ」を連發する。修身の時間に傍聴に來て鼻糞をはぢる先生は、來年の今頃も、やはり同じ時間に鼻糞をはぢるだらう。斯くて龍南の思想界には永遠の冬が續く。あはれに枯れはてた永遠の冬が續く。困つた物だ、困つた物だが仕方がない。實際困つた物だ。(渙生)

## 落葉心あり

(一) 風なきに梧葉(一)沮落の悲調を漏し、龍山の麓澄徹の氣靜かに乾坤に溢る。試に高きに登つて秋天に嘯け、秋は自覺の期なり、覺醒の時なり。

活動は男兒の本領にあらずや、特性に非ずや。死したる平和は吾人の取るべき所にあらず、龍南の稜々片氣(一)、天に冲する蘇嶽の噴焰の如き、磅礴せる

勢力を以て、落莫の天地八紘を震駭せしめ、劃然として品彙、匹儔すべき者なき、一新時期を建設し、讚美と光榮とを以て充されし龍南史上、大書すべき一大特質を作ることを得ば、其の快は果して如何。

(二) 骨と筋とは價值少し。是れに血と涙を加へて始めて人に活動の存在有り。不名譽は不名譽として千秋痕跡新なり、吾人これを思へば痛痕の至りに堪へず。堅實素朴の校風をして馥郁たる香氣あらしめ、汚れたる歴史は、全く遠く暗黒の過去に葬り盡して、更に更に、光彩と活躍とを内容とせる意義ある歴史に踏み入らしめ、一は以て先進者の意を強くし、一は以て後繼者に絶好の範を垂れんことに勉めよ。

(三) 吾人は偉大なる勇氣、沈勇なる勇氣を養はざるべからず、堅忍の精神と不拔の豪氣とを以て、百難を排し、混亂せる吾人の進むべき道路を自らの手を以て開き、邦家百年の大計を定むべき事業に、握手すべく進まざるべからず、こゝに於てか、書籍堆裡、沈思熟考、心膽の修養に資す、又可ならずや、要は勝

利者たるべきにあり、征服せる勝利の觀樂は則ち男子の觀樂ならずして何ぞ。

### 三

若し夫れ亂飲暴食が、胃腑の遊離鹽酸を奪ふが如く、文明の食傷は、人間の情と涙とを滅却せしむ。

個人主義の浸染は在來の家族制度を呪咀し、之れを打破するを以て合理的實在なりと信ず。

「詩人は生る、成るに非ず」合理的の概念は人をして偏狂ならしめ、花鳥風月その間些少と雖神秘なるものゝ存在を許さざらんとす、既に神秘なる者の存在を許さず、而かも此の間尙幽去なる詩趣を抽出せんとする、亦憂々乎として難からずや。

「鮎は瀬に住み鳥は木に棲り人は情の蔭に宿る。」形式の絢爛に眩惑せられ、繁褥なる理義の説明に傾聽せる間に、人は知らず、識らず、沙漠の曠野に誘はれて、情と涙とを奪ひ去らる。吁花晨月夕、情の露に百年の命を樂む者は幸なるかな。「落ちぶれて袖に涙のかゝるとき人の心の奥ぞ知らるゝ」寔に人の心を語り、誠を示すものは涙夫れ自身のみ。嬋娟たる雨後の月の如何に、華かなるかを知る者は、又實

に涙によりて洗はれたる人生の如何に美しく、親むべきかを思ふ可きなり。涙は虚偽を示す可らず、須磨の浦回の夕風に、花を散らせし熊谷の涙や、靜御前の涙や、幾千世を通じて人の等しく美はしとする處、純なる哉、永遠に亘りて、溫き生命の影を宿すもの獨り這の涙の流れのみ。

### 四

今や請誦攀緣、榮を槐門に繋がんと欲するもの滔々たる天下盡く然り、而かも槐門尊貴の人、之を選ぶに華々たる春風の温味を包まず、取捨採擇の手段は依然として形式の好惡に流れ、撰擇拔擢の榮光を贏ち得たる者の得々然たるに反し、轆轤不遇を嘆ずる失敗者の悲痛は、素よりなるべきも而も、其の得意の者必ずしも優秀ならずして、失望の人却て精英なるの事例は、世に乏しからず。好愛の瞳を透して眺むるとき、鷄雉忽然として鳳凰たり、憎惡の眼を借りて見たるとき、珠玉突如として瓦石たり。實にや千里の駒時に槽檻の間に伏し、趙氏が璧或は砂礫の中に葬むらる。禍なる哉、吾れ獨り醒むるも、衆人多く醉へり。皓々の白途に物を輝すに由なく、察々



の身焉んぞ世の汝々を容れむや。衣を振び、冠を彈き、寧ろ湘流に投じて江魚の腹中を希ふもの、豈に獨り枯槁憔悴の三閭太夫のみならむや。

自家頭上の利害には、蚊虻の羽風にも心を動かすも、事他人の損益に對しては、晏如として對岸の火災視するなり。窮鳥懷に入れば、無心の獵夫も猶且之を殺すに忍びず。涙の價値を蔑視して、人生の意義を蹂躪するものは、實に今日の文明なり。さらばいざ、沛然たる萬斛の涙何の處に求むべき。

五

秋風起る處悲愁あり。人は無限の哀觀に出入し懊惱の波は額に刻まれ、榮達の跡を趁うて行樂の夢盡く。人生五十、一萬八千日朝鳥雀に醒まされ、夕星羅の下に寢ね、其の間時ありてか或は笑ひ、時ありてか或は悲む。彼の現世を超越して一段の高處より翫賞的に人生を眺むるとき、無情と冷酷と滿身の彼を包み愉樂の巨人を呪ふ。

生活難は胸に流るゝ詩の叫びを洩し、自然の啓示と感想それによりて冷却せられ、一篇無韻の詩なきに非ずや。文明は進歩か果た墮落か。

風月を友として孤舟を長汀曲浦に繰る漁翁の歌、何ぞそれ切々として怨むが如き。

紫山水明の間に放浪して、霧の中に座臥せる樵夫、興到れば即ち西山の蕨を摘んで村酒の醇なるを汲む醉へば空瓢を叩いて長吟す。何ぞその境遇の變遷として長へに春風に似たる。

彼の朝に月を踏んで澤國の畦に培ひ、夕には滿天の星を戴いて歸る農夫、其の心情を探れば淡々たり、その境遇や霽如たり。

山のだづすまい、水の流れ、春風秋月に變り行く四圍の景物すべて、文明に依りて破壊せられ、俗化し盡されむとす。豈に金玉の音を發すべき詩趣を求むることを得むや。(扇 獄)

獨座獨語

◎豈夫れ教育界のみと言はんや、政治、法律、宗教の何れの社會も知識萬能の時代となりて、如何なる問題も智と理との赴くところ闡明に解決せられざる莫しと思ふに至る、之れ歐州文明の謳歌者が其爛熟の潮流に溺れて、遂に高きに登りて遠く眼界を擴む

る能はざるに依る。

吾人は須らく一望千里の眼を放つ可き高き足臺を堅固にせざる可らず。

◎今の剛毅朴訥を説く者果して其眞意を解せるか、剛毅説くべきものに非ず、朴訥強ふべきものにあらず、此意義は只只孔聖一人に於てのみ價值あるものに非ずや。何となれば此語や實に孔子の人格より自然に聞ゆる音響なれば也。

故に吾人は深夜青燈の下獨り瞑目して心中會得する事を得べきも、大聲呼號するも、寸毫の價值なし。寧ろ退いて黙するに如かず。

◎剛毅朴訥の意義も孔子の口より聞きたる時に初めて吾人凡夫にもその權威を認むべし。吾人は其意味に於て百のブروفエツサーよりも一孔聖を欲するもの也。眼を上げ得ざる潮流の渦中より叫ぶエクウケーションの聲は一として吾人の耳朶に達せず。

あと吾人文明の聖代に生れて只一つ求めて見出し得ざるもの、實に此偉大なる人格の教育者に非ずや。

◎吾人は今や剛毅朴訥を吾が龍南の校風なりと絶叫す可きの時に非ず、深く自覺すべきの秋に遇へり。

龍南一千の健兒が一聲に叫ぶ其聲よりも、之が自覺者三人の鮮血が毛細管を流るゝ聲を大なりとするもの也。

然り此三人にして孔聖を去る雷一步の地盤に立てりと謂ふ可し。

◎「各個人皆獨立不羈の精神を持し各々其個性を發揮して而かも其間自ら自由にして貴き社會又は團體を實現せん」底の人格とのニイチエの理想は、決して孔子の仁の教と相離る遠きに非ざる可し。故に各個人が各々其個性の完全なる發達を之れ務めたらんには、必ずや其集合を以て成る團體には、美しき貴き一道の光明無きを得んや。

斯の如くにして我が龍南にも孔子の所謂剛毅朴訥の意義を含める一脈の鮮血流るゝを得べし。

◎龍南焉ぞ夫れ形式に富める。朴訥の文字既に形武のみ、此形式の影にかくれて、支配者は其責を免れんとし、被支配者は巧みに其間隙をくぐり抜けんとす。

師愛弟從絶無に非ずんば夫れ僞れるに庶幾らんか。

形式は吾人の前に横はれる一大障壁にして、眞の自己、僞らざる自己、僞らざる自己の大敵なり。

◎周圍に若からず而かも老いざる松を繞らし、其中に滑かなる短草を敷ける好運動場、蓋し吾が武夫原の如きは天下多く見ざるところ也、朝に白霜を踏んで天地正大の氣に接すべく夕蒼天に星斗を數へて默想するを得べし。雷吾人は近時体操の乱調なるを見て武夫原に出づるを快とせざるもの也。元來体操は規律整然たるものあれば足る、安んぞ末枝に走る要あらんや。吾人は体操を爲すものとして、一時間を百姓集合のしだらなき無規律に了らんよりは、寧ろ緊縮せる規律の下に一時間の職分を果すを快とするもの也。

新春の曙光近きにあり、吾人は緊縮の味を知らざる可らざると同時に、体操科當路に一層の努力あらん事を望む。

◎辛亥の秋冬、行雲暗澹として東西天下多事、さきに伊土難をかまへ、今滿韓隙をかもす、而して龍南の秋多事を極む、疾風過ぎて勁草を知るの感あり也。

——幼き時老母よりききたる話——

『それは私の住む村で野越は山越に都から遠い、片田舎、汽車も通つて居なければ電信も架りて居ない至極平穩無事な村である、そこに山の麓に湧き出づる清水がある、一人の伶俐な老人がその側の石に佛の像を刻み込んだのは廿年の昔であつた、老人は由來清水の靈驗を吹聴し自ら佛の巫子となつて信者を導いて居る、今では近在數百の無智な信者が朝夕集り群つて居る、此數百の信者を左右する力は單に此老人の掌中にあつた、老人は鼻高々と此佛を信する限り此村は平穩無事ならんと公言して居た、思ひきやある風烈しき夜、谷底の一民家に火を失した、山間階をなして建てる草屋の民家を其火は上へ上へともに移り此村の大半を焼き盡した、延いては野をやき山をも焼いた。村民は無智で佛を信じて居た丈けに佛の加護の無能と老人の言ひ不信とを怒つた、ある若い、そして少しく字の讀める人は、眞先きに彼の老人を村から追ひ出して、石に刻める佛像を壊さんと思つた、無智の村民も賛成した、併し乍ら一夜此村民等は鐵槌を持ち斧を持つて清水の湧き出づる邊に行き、刻石佛像を眺めて躊躇した、何となれ

ば彼等は無智なるがために、ヒヨツトすれば後から佛像の崇りがありはすまいかと疑つたからである、眞先きに立つた若い人も佛像を否定するにはあまりに自信がない程文明の空氣に觸れて居なかつた、村民の握れる鐵槌の手と斧の手とは次第にゆるんだ、そして闇にまぎれて一人去り二人去り……。

清水の湧く山の麓の石に刻まれたる佛像は依然として其まゝに残された、勿論村民の自信と團結と無きを認めたる老人は幾分の信者を減じ乍らも依然として村を追はれずに住つて居る。』

老母は幼き余に附言しぬ、もし若き一二の人にして迷信なき程に學あるか、又は身を犠牲にする決心ありて、先づ最初の鐵槌を加へたらんには、村民争うて手にせる武器を下せしならん、而して永久に村民を迷はす老巫子と佛像とを此村に止めざりしならん惜哉と。

◎あるものに囚はれたる者のあはれさよ。

◎犠牲の精神なき者の最後のあはれさよ。

十二月六日夜 天行生

……「ああ」とアルシノエは豫言でもするやうに「未來は吾々の内にあります。我々の狂氣や苦痛のうちに在ります。ジュリアノは誤らなかつた。吾等は譽もなく、心に思ふ事も語らず、人にも知られず。一人淋しく群に交して己が事業を仕遂げなければなりません。我等は祭壇の灰へ最後の閃めきを押し隠して後の世の人が新たに松明を灯すすがに仕なければなりません。私共のなし終つた所から後の世の人々は仕始めるのであります。ヘラスは亡びやうともかまはぬ。人々はその紀念を掘りあげ、大理石の破片をやりあげて、必ず涙を流して祈る時がありませう。……ヘラスと共に貴方も私も甦るのであります。……」

——(背教者ジュリアノ)——

"I send you a flower gathered on the sands. It is a species of wild lily, marvellous when growing, and of an odor so penetrating that I often find at the bottom of the chalice an insect in a swoon of intoxication. The whole coast is covered with these passionate lilies, which beneath the torrid sun, on the broiling sand, flower in one minute, and only live a few hours. See how charming this flower is, even when dead!"

——(D'Annunzio)——